07200304 佐藤大雅

1. はじめに

本プログラムを通じて、アメリカの医学生と 1 週間にわたり様々な行動を共にし、地域医療の実際を学ぶとともに、深い国際交流を行う機会を得た。最初、私は自身の英語力に対する苦手意識があった。しかし、この 1 週間でたくさんトライし、親身に聞こうとしてくれる留学生のおかげでよりたくさん英語を勉強したいというマインドに変わった。

2. 地域医療に関する学習

プログラム期間中、日本の地域医療について留学生と共に学んだ。特に高齢化が進む地域における在宅医療や訪問診療の重要性について議論を交わした。日米の医療保険制度やアクセスの違いを比較しながら、患者さんたちにとっての生きがいとは何かを考えたり、それをどのように確保したりするかを考えた。改めて考えてみるとポリクリを回っていて患者さんの生きがいについて考えることをあまりできていなかったなと感じた。海外の医学生と生きがい(=well-being)について考えることは国際交流はもちろん、自分にとっても医療とは何かについて考える、いいきっかけになった。

3. かがやきクリニックでの宿泊と文化交流

今回の交流の中で最も印象深かったのは、かがやきクリニックでの宿泊を伴う共同生活である。日中の真面目な医療の議論を離れ、フランクに語り合うことで、お互いの人間性や文化的背景への理解が飛躍的に深まった。 例えば、共にサウナに入った際、日本の「整う」という概念と感覚を共有したことは非常に興味深い体験であった。アメリカにもサウナはあるものの、「整う」というプロセスまで深く楽しむ文化は珍しいようで、彼らにとって新鮮な驚きだったようだった。また、恋愛における「付き合うまでの過程」の違いについても話した。話していると、アメリカ人女性にとってのスタンダードは非常に基準が日本人からしたら高く、アメリカ人男性のように自分もジェントルマンになる必要性を強く感じた。バディの子や他の子も色々な行動で指摘をしてくれていいトレーニングにもなった。日本とアメリカの価値観の差異を肌で感じることができ、こうした非公式な場での対話こそが、本当の相互理解の土台になると実感した。

4. 学んだこと

この 1 週間で得た最大の成果は、英語でのコミュニケーションに対する姿勢である。最初は失敗を恐れて躊躇することが多かったが、何度も対話をトライする中で、「わからない単語や表現が出てきたら、その場で素直に相手に聞けばいい」ということに気づいた。泥臭くても「伝えよう、理解しよう」とする姿勢をしていれば相手も説明してくれたり、より良い表現を教えてくれたりする。このトライが一番英語力をあげるのではないかなと感じた。

5. おわりに

今回の交流は、単なる語学研修や医療実習の枠を超え、多角的な視点を持つための貴重なステップとなった。これまでは、留学などは言語の壁から抵抗感があり自分には高いハードル

だと感じていたが、今回のプログラムを通して言葉の壁をこえたり相手の文化や価値観を理解したりすることは、非常に楽しいことだと痛感すると共に、今後もこのように色々な背景を持つ人々と交流していきたいと感じた。また、同じ医学生であるのに勉強量が遥かに違い、知識の多さに驚かされた。日常会話は困らなかったが、医学の専門的な話になると顕著に自分の勉強不足を目の当たりにしとても悔しかった。英語をより勉強していくことはもちろん、彼らと将来対等に医学など専門的な話もできるようになるためにより勉強のモチベーションも湧いた良い体験だった。
今回、このような機会を私にくださったすべての皆様に感謝します。



